

STRANGE FOLK

KULA SHAKER FANZINE

ISSUE NO.3
OCT 2007

アルバムレビュー

Strangefolk

インタビュー

Alonza, Harry & Paul

独占コラム

Guru Madness

Gig Reviews

2 x LONDON, BRISTOL
and FUJIROCK FESTIVAL

PLUS PHOTOS!

Dear Dudes and Dudettes,



STRANGE FOLK 第3号へようこそ。本誌は、たくさんの独占記事と共に帰って来ました！

はじめに、既刊の2号をダウンロードしてくださった方々のおかげで、各号の読者が増えていることを嬉しく思います。

偶然にも、Kula Shaker は待望のサード・アルバムのタイトルを『Strangefolk』としました。おそらく皆さんは、本誌がファンジンにまったく同じ名前を選んでいたことにお気づきでしょう。ちょっと素敵な偶然です。しかし、勇敢な読者の皆さん、ここではっきりさせてください。当誌の名称を決めたとき、私たちはアルバムタイトルについてのヒントは何も知りませんでした。そして私たちは、この名称の使用について Kula Shaker と係争中です！

その偶然の出来事の後、私たちは、人々の未来を予言し、警告して世界中を旅する、神秘的な占い師になることを考えました！ けれど、私たちが得意なこと、Kula キャンプから最新ニュースを提供することに専念するという結論に達しました！

この6ヶ月にわたって、本誌は、インタビューやレビュー、写真やコラム、その他、Kula に関する価値のあるものを収集するのに多忙を極めています。多くの未回答の質問を依頼され、待ち望まれた多くの回答を得ました。

Kula Shaker の最も珍しいリリースが何か知っていますか？ Alonza は何に夢中になっているのか？ 何故 Harry は古風なヒゲを生やすことにしたのか？ 何のために Paul は服を全部脱ぐのか？ 狂気のグルとは一体誰なのか？ 本誌はそのすべてを明らかにします！

皆さんが Strange Folk の第3号を楽しんでくれることを願っています。コメントや批判は大歓迎です。4号を楽しみにしててください、そして忘れないで、

Be good to yourself - love with your heart!

Daniel & Andrea



Contributors



Editors:

Andrea Zachrau (hosannah@t-online.de) – text, photos

Daniel S. Taylor-Lind (smokinmojo@hotmail.com) – text, photos

Layout:

Anni Kotisalo (anni.kotisalo@gmail.com)

With contributions from:

Sarah Burton – proof-reading

Yam (MusicalElitist) – Music section

Mizuho – Fuji Rock review

Leila Gilley – photos

Chelle Hawkins – photos

Alexander von Mehren – photos

Nick Huggins – photos

Strange Ben – photos

Ellen Averson – photos

Thank You to the Pecker family

and to Mizuho and Mayuko for translating the fanzines into Japanese



Check out the fanzine mspace at: <http://www.myspace.com/kulafanzine>

Published on <http://www.kulashaker.net>

※訳者より:

これは、オリジナル版発行者である Andrea さんの許可を得て和訳してあります。また、原文中のスラング、ジョークは上手く訳せていない／訳していない箇所があります。読み苦しいところがあるかと思いますが、訳者は英語上級者ではありませんのでお許しくださいね。(英語が読める方は、オリジナルの英語版を読むことをおすすめします!)

Contents



- 2** あいさつ
- 4** 目次
- 5** NEWS & GOSSIP
- 6** STRANGEFOLK アルバムレビュー
- 9** SECOND SIGHT シングルレビュー
- 10** TIME-TRAVELLING INTO THE BIG CITY
ロンドンライブレビュー：Andrea
- 13** THE THEKLA SOCIAL (ブリストル)
レビュー：Dan
- 16** iTUNES FESTIVAL (ロンドン)
レビュー：Dan
- 19** FUJI ROCK FESTIVAL (日本)
レビュー：Mizuho
- 21** ライブ写真特集
- 24** GURU MADNESS
Don Pecker のコラム
- 26** インタビュー
Paul、Alonza、Harry へのインタビュー
- 33** KULA 機材コーナー
パート3：ベース
- 34** 編集者紹介



News & Gossip

皆さんで存知のように、Kula Shaker は今年 3rd アルバムをリリースしました。驚くことではありませんが、NME (※訳注：イギリスの音楽誌) のアルバム評はあまり好意的ではありませんでした。なので、NME が『K』について最初に書いた記事を見せるのは面白いかもしれません。

9点 (10 点中) - ……『K』はとてつもない。確実に The Stone Roses の流れを汲む、彼らの内臓部を苦しめるであろう汎次元のパワーポップの、強力で、縦ノリのグルーヴを発生させている……The Verve を凶暴な人種にしたような音楽で、地平線と同じくらい巨大だ……驚くほど自信に満ちた、音楽の才能に恵まれている、光り輝く快楽主義者だ……

New Musical Express (1996.9.14 号)

バンドは、ひと夏かけて新しいリズムギタリストのオーディションをしていましたが、幸いにも誰にも決まりませんでした。

今のところ、Paul Winterhart の弟、Joff が作ったショートフィルム『Broken Crayon (仮タイトル)』は明るみに出ていません。主要キャストは Don と Simon で、Paul の名場面がフィーチャーされています。サウンドトラックは Pecker 氏と Bucky によるものです。購入方法についての詳細は次号にて！

本誌は、90 年代半ばに録音された、Don Pecker 作、Kula Shaker が伴奏している “Into the Void” という未発表曲があると聞きました。もし従来の予定が変更されるなら、この偉大な曲はお目の高い世界中の Kula ファンの前に現れるかもしれません！

ご存知でしたか？ Kula Shaker がカバーしたすべての曲 (“Hush”、“Ballad of a Thin Man”、“Peace Frog”) の CD / レコードを、自分たちでカバーとしてレコーディングするまでの長い間、Paul がまったく持っていなかったことを！

2007 年は、Kula Shaker のコンピレーションで、無茶苦茶なアートワークが特徴の『Tattva』もリリースされました。

Acid Jazz Records は、今春、Shep (Alonza、Paul を含む素晴らしいメンバーから成る) の “Second Sight” オリジナル・デモバージョンがフィーチャーされた、サイケ・コンピレーション『Sugar Lumps』をリリースしました。

“Second Sight” のプロモーションビデオは、ブリストルで撮影されました。

『Strangefolk』のジャケットのモデルは、他ならない Crispian の妻、Joe Mills その人です。

The Kays は、かつて Naked というバンド (Reef としての方が有名) とよくサッカーをしていたが、どうやら Kula の方が上手かったようだ！

Paul は過去にヨーロッパ内で、Gary Stringer (Reef のメンバー) のサポートを数回したことがあります！

The Jeevas の著作権管理会社 Cowboy Music は、George Harrison の曲名にちなんで付けられたって知ってた？

楽屋ではどんなものを飲んでいるんだろうと思っているあなた、それは最高級のプリティッシュティーです！

Kula Shaker は、2008 年初頭に Japan ツアーを計画しています。その後はアメリカでのツアーも行います。

Kula は、9/30 にサウサンプトンでスタートした UK ツアーの前半戦をエンジョイしました。今はハンプルグやブリュッセルといったさらに有名な土地へ向かっています。ロンドンの KOKO (再結成してから、今のところ一番大きな会場) でのライブも楽しみました。

Album review: Strange Folk



Kula Shaker の新しい名作、サードアルバム『Strangefolk』を、当誌の編集者はこう思っています。

OUT ON THE HIGHWAY

Dan: うん、“Out on the Highway” でいいスタートを切ってるね。新曲の中で僕のお気に入りだよ。ある種の古典的な感じがあるね。メロディは凄くいいし、何とかサウンドを高揚させてるし、たとえ題材がちょっと憂鬱なものだとしても、つまり、Mills 一家の友人の早すぎる死だとしても、重苦しくない。

Andrea: 素晴らしい曲よ、Kula Shaker のアルバムの始まりに予想してたものだよ。たとえこの曲が悲しい話を歌っ

ているとしても、『Strangefolk』へ温かく迎えるわ。

SECOND SIGHT

Dan: いつもこの曲飛ばしちゃうんだ、個人的に好きじゃない。凄くいい曲だったかもしれないってことに気づくのはちょっと時間がかかるかもしれないけど、申し訳ないけど僕の中では、全くその域に達してないんだ。Alonza が書いた曲で、Don Pecker への言及を含んでるね。

Andrea: とても重要な 1st. シングルね。私に言わせればいい選択よ、イントロをちょっと短く出来たかもしれなくてもね。私はイントロが終わるところまで早送りしがち。ライブバージョンは凄くいいんだけどね。

DIE FOR LOVE

Dan: これもまたいい曲だね、愛と反戦主義について慎重に書かれた曲だ。(歌詞を) オリジナルの "fuck you up inside" から "burn you up inside" に変えてあるけど、まだそれに慣れないよ! 間違いなく聞き手の中で育つ曲だね。

Andrea: 私たちこれ前に聞いたよね? でも素敵な小曲のままね。"defeat your enemies with a song" ってところが大好き。Crispian は凄く賢い人ね。

GREAT DICTATOR

Dan: これも僕が好きじゃない曲。誤解しないでよ、僕は Kula の超大ファンだよ、でもオリジナルのガレージバージョンの方が好きなんだ。歌詞的にも音的にも、政治的な主張のためだけに作ってる感じがするからね!

Andrea: みんな、何がしたいんだって言うかもね。それでも私はこの曲が大好き! うん、ある意味ではバカバカしいし、アルバムに入れる必要はなかった。でもライブで見るのは凄く楽しいわ。それにこのアルバムの他のほとんどの曲よりずっと率直よ。バックコーラスのアレンジの仕方が好きだなあ。

STRANGEFOLK

Dan: ちょっとしたいい間奏だね、アルバムの中で、通路を歩いてアイスクリームを買いに行くポイントみたい。この歌詞があってかえって良かったんじゃないかな。じゃなかったら、『Kollekted』に入ってる、失われた壮大な同名の曲とちっとも似てないなって思う人がいたかもしれないからね。

Andrea: これは省かれてもよかった、とか、オリジナルの方が入って欲しかった、ってみんな言うかもね。私もそう思う! あのオリジナルバージョンを使って、それプラス、このナレーションを入れるべきだった。実際あの曲が好きだし、Song of Love の前に適してると思うの。

SONG OF LOVE/NARAYANA

Dan: アルバムの象徴のインド風の壮大な曲、もしくは尋ねる相手によっては愚かな曲、個人的には大好きだね。すべてのるつぼの中のマントラやファンキーな管楽器、Shruti Box、Dohl Drum (※訳注: 共にインドの楽器)、ぼんやりとしたボーカルが、僕らの集合的なグローバルな世界の

良心についての歌詞で締めくくられてる。1分9秒のところで左のスピーカーから聞こえるちょっとしたオルガンの音が鬱陶しいけど。意図的だと思わないから、取り除くべきだね。まあでもそれはそれとして、凄い曲だね。

Andrea: 部分的にサンスクリットで歌われている壮大な曲、人々が Kula に期待するものね。もしアルバムからインドの要素がすっかり省かれてたら悲しかったわ。たとえ私たちがライブや過去のコラボレーションで "Narayan" を既に知ってても、再アレンジに成功してる。このアルバムのベストトラックの一つね。"Govinda" のような本当の聖歌になるといいな!

SHADOWLANDS

Dan: この曲は音的に凄くよく出来てると思う。凄くいい曲だ。素晴らしいメロディ、素敵な歌詞。でもアレンジは合っていないと思うな。ライブでやるのを見るのは楽しみだけだね。

Andrea: なんて美しい曲なのかしらね? この曲のすべてが好きよ。

FOOL THAT I AM

Dan: 僕個人のお気に入り。風邪を引くのと同じくらいキャッチーな、あからさまにポップな曲だね。このコーラスは僕にとってアルバム全体の中でのハイライトだよ。

Andrea: まったく同意見。天才的な歌詞で、間違いなく私も大好きな曲のうちの一つよ。

HURRICANE SEASON

Dan: これは Kula Shaker っぽくないね、ライブでは実験的でいいけど、アルバムバージョンはどうもなあ。

Andrea: そう? 私は凄くいいと思うけどな、アルバムでもライブでも。実際にひとつの物語の全体が語られている点が好きだなあ。

OL' JACK TAR

Dan: これは B 面の方が合ってると思うな。

Andrea: 私的にアルバムで一番のワースト曲。いつも飛ばしがちなの。ごめんなさい。

6FT DOWN

Dan: これもガレージ EP からの焼き直しだね。オリジナルから進化してないから、僕はむしろガレージバージョンを聴

きたいな。やっぱりいい曲だけど、知ってる曲がアルバムに入るのはちょっとガッカリ。

Andrea: Kula ファンの耳には新しいものはないわね。コーラスが始まるまでは好き。何でもまた収録しようって思ったのかしら。あ、でも彼ら実際バックコーラスで“Jeeva”って歌ってるよね？ それとも私の耳が変なのかな？

DR KITT

Dan: 大好きだね。とてつもなくサイケデリック、最高で、素晴らしいイメージ。普通だったら“Doctor, Doctor I think I am going mad”ってところが、“Doctor, Doctor they say you're miracle man”になっているのが相当いい、僕的にはこれぞ Kula Shaker だね。

Andrea: アルバムのベストソングね！ 間違いなく。次のシングルに選んでくれたらいいなあ。Kula Shaker の一番いいところよ、ハモンドのサウンドが 60 年代に引き戻す感じがするわね。Kula をチャートに戻せるかもしれないキャッチーな曲。

PERSEPHONE

Dan: アルバムは表向きは Dr Kitt で終わるんだけど、これは Kula Shaker だからね、すごく短いフランス語ではあるけど、シークレットトラックがあるんだ。ボーナストラックとして、ヨーロッパ盤には“Persephone”が、日本盤には“Super CB Operator”と“Wannabe Famous”が入ってる。“Persephone”はホント大好きだなあ、よく出来るし、これまでの Kula Shaker にはなかった感じだね。チェロは素晴らしいし、曲を賞賛してる。一番ビートルズっぽい曲だね。締めくくりがいいね。日本独占ボーナストラックはまさしく決め手になる曲。でもボーナストラックとして入れたのは正解だよ、アルバムの他の曲とは合わないからね。呑気なカントリー風の曲で、歌詞やテーマ、メロディのどれもが The Kinks によく似てるね。The Jeevas のアルバムに入っても浮かなかっただろうな。

Andrea: “Persephone”は今まで聴いたことがある曲の中で最も美しい曲の一つだね。はじめて聴いた時はちょっとイライラしたの、だって今まで Kula の曲にチェロが使われたことは一度もなかったから。でも今はホントに好きになって来た。

全体的な感想

Dan: これは 2 人以上の人間にプロデュースされたってことに、聞き手は間違いなく気づくと思う。音のイメージに首尾一貫としたテーマが欠けてるから。まあでも前作の『Peasants, Pigs & Astronauts』と比べてだけど。あれは Bob Ezrin が上手くプロデュースしてるよね。何が不自然かって、ミックスでベースの音が大きいってこと。僕だったらもうちょっと下げただろうね、まあ個人の好みだけど。ギターの音も好きじゃない。自然ないいギターサウンドを得るのに時間をかけてない感じだし、オルガンの音がどうも好きじゃない。この批評は全部制作上のことについてだから、実際の演奏のアラ探しは絶対に出来ないよ。でも、このアルバム制作は Kula のビジョンに共感してない気がするんだ。いいアルバムだと思う。けど、もし“Be Merciful”と“Revenge of the King”が入ってたら、凄いアルバムになってただろうなあ……。

Andrea: まず、Kula がまたアルバムを作ってくれたことにとっても感謝しています。『K』や『PPA』とは絶対比べられない、全然違う雰囲気を持ってるもの。サイケデリックな影響は最大限に探求されてるし、“Song of Love”や“Dr Kitt”といった本当にクラシックな曲もある。『K』や『PPA』は全体を 1 つのものとして見れたけど、『Strangefolk』は“Strangefolk”という曲を境に半分に分けられるわね。“Out on the Highway”は幕開けにいい選曲だし、次の曲もよく合ってる。“Shadowlands”、“Fool That I Am”、“Hurricane Season”、そして“Ol' Jack Tar”もね。私的には“Dr Kitt”がこのアルバムで傑出した曲ね。この曲から“Persephone”に続いているヨーロッパ盤が、私は一番好きだわ。前 2 作に比べて『Strangefolk』はよりテクニカルに思えるわ。“ガレージで録音した”って感じをもっと残しておいてほしかったなあ。

Second Sight

2007.9.13 イギリスにて発売

『Garage EP』は別として、これは、Kula が再結成してから初めてイギリスでリリースされたシングルだが、なんと言えばいいだろうか。僕はこのアートワークには耐えられない。ピンクと黒に、蛍光グリーンは合うのだろうか？ このアートワークを手掛けた Stylorouge は 90 年代の Kula のほとんどのアートワークを手掛けており、それがたとえ酷いものだとしても、このちょっとした継続性は素晴らしいことだ。

このシングルは、CD、7inch アナログ、ダウンロードという 3 形式でリリースされた。7inch とダウンロード版のカップリングは、“Out on the Highway” のアコースティックバージョン（日本盤 EP『Freedom Lovin' People』を購入したコアなファンならすでに持っているだろう。それと別個にわざわざレビューは書きたくない!）。アートワークは別にして、これはとても満足できるシングルだ。“Second Sight” は、アルバムの中でも僕の好きな曲ではない。僕は“Out on the Highway”の方が明らかに最初のシングルには良いのではないかと思った。リリース前に彼らが僕にそれを尋ねることはまずないだろうが……。

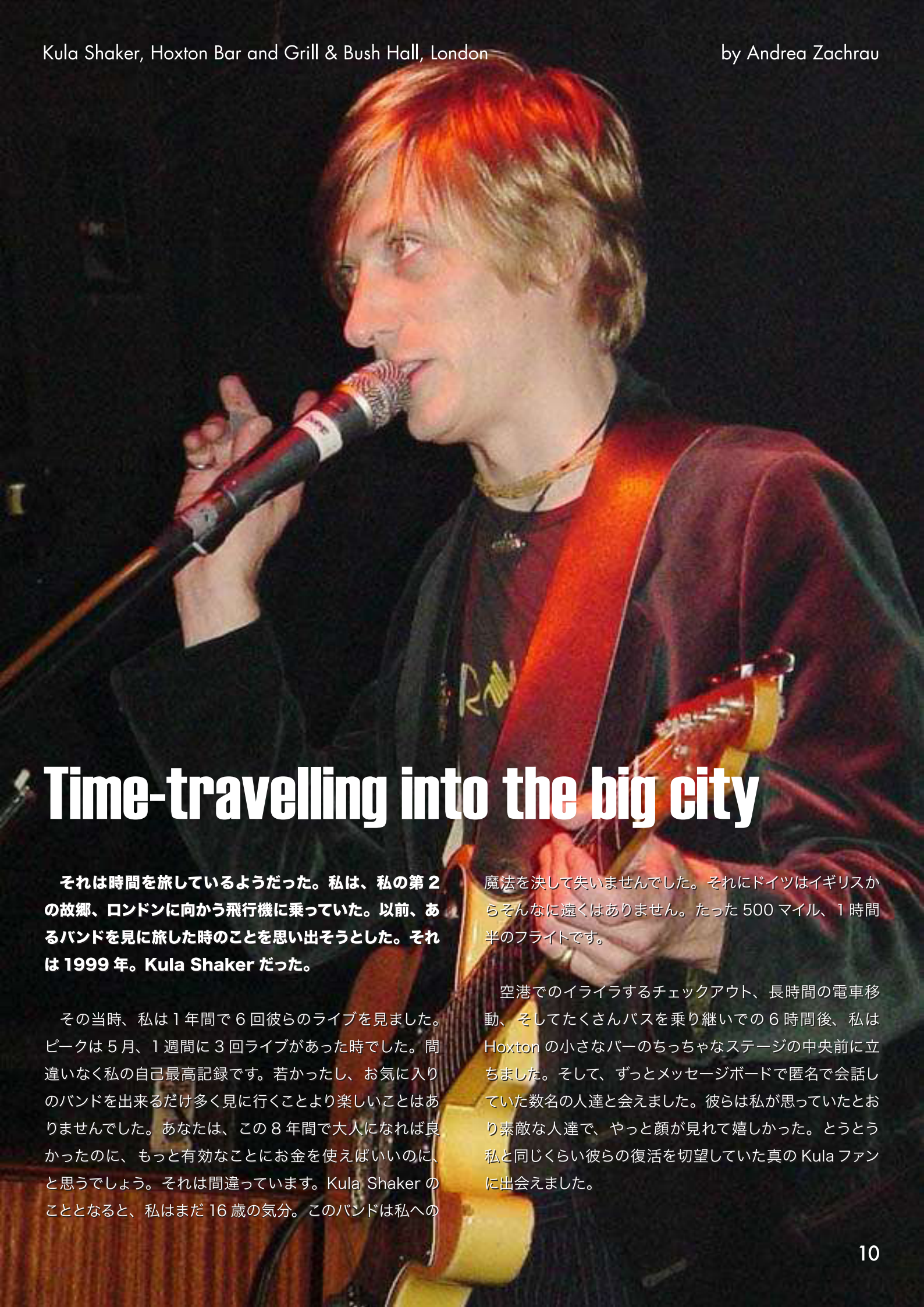
証明するものがなくても、バンドが本当にリラックスして取り組めるのがカップリング曲なので、そのカップリング曲のクオリティーで、バンドのクオリティーを判断することができる。今回の CD シングルには 2 つのカップリング曲が入っているので、僕は買う価値があると思う。これらの 2 曲は、力強いリズムのサイケデリック・ロック、実際、アルバムの中のどの曲よりもさらにサイケデリックだ（「Song of Love」は除く）。カップリング 1 曲目は、Alonza 作で、さらに彼自身が歌った“All I Need”。Alonza がついに Kula Shaker でリードボーカルをとったのを面白いと思ったのは僕だけだろうか？ とても 60 年代風でアップテンポ、フォーキーな雰囲気がある。それが巨大なエレクトリックな曲であると知る前に、アコースティックに始まる。僕にとってこの曲は、ミドルテンポの 8 ビートに乗るサイケデリックな後方のギター、ヘビーなリバーブ、ディレイで成り立っている。狂ったホーンも大好きだ！ この曲は、The Who



の 60 年代半ばのニオイが強くなる（説明できない）ことも書き足しておこう。Alonza は The Who の大ファンなので、大して驚くことではない。

最後の曲“Dead Crusader”はカッコイイ小曲で、車で聞か、目立たない歌を集めたテープに入れるのが理想的！ 叙情詩的で、イラク、アフガニスタンと中東の現在の状況に重い平行を描く、中世の改革運動に参加しているイメージの寄せ集めだ。とても素晴らしいヘビーなギターのイントロ。それぞれの楽器が個々に入ってきて、ギターの数小節後にはオルガンが始まり、Paul はドラムで小さいロールを作る。ベースも入ってきて、歌が始まればギターは短く突き刺すように演奏し始める（60's のソウルソングで非常に一般的な特徴）。そうして、歌は進んでいく！ 風変わりで、人を引き付けるとても素晴らしい曲だ。この曲も昔ながらの Kula サウンドのミドルな 8 ビートで、“Holy River”を思い出させる。生き生きとしたトラックが軋み音をあげて止まり、すなわち失速し、ゆっくりと消えていく大きなコードで終わる。

悪くないカムバックだ！



Time-travelling into the big city

それは時間を旅しているようだった。私は、私の第2の故郷、ロンドンに向かう飛行機に乗っていた。以前、あるバンドを見に旅した時のことを思い出そうとした。それは1999年。Kula Shakerだった。

その当時、私は1年間で6回彼らのライブを見ました。ピークは5月、1週間に3回ライブがあった時でした。間違いなく私の自己最高記録です。若かったし、お気に入りのバンドを出来るだけ多く見に行くことより楽しいことはありませんでした。あなたは、この8年間で大人になれば良かったのに、もっと有効なことにお金を使えばいいのに、と思うでしょう。それは間違っています。Kula Shakerのこととなると、私はまだ16歳の気分。このバンドは私への

魔法を決して失いませんでした。それにドイツはイギリスからそんなに遠くはありません。たった500マイル、1時間半のフライトです。

空港でのイライラするチェックアウト、長時間の電車移動、そしてたくさんバスを乗り継いで6時間後、私はHoxtonの小さなバーのちっちゃなステージの中央前に立ちました。そして、ずっとメッセージボードで匿名で会話していた数名の人達と会えました。彼らは私が思っていたとおり素敵な人達で、やっと顔が見れて嬉しかった。とうとう私と同じくらい彼らの復活を切望していた真のKulaファンに出会えました。

私たちが最前列を確保し、3杯目のビールを飲んでいたら、“Sound of Drums”の最初のリフがこの空間を満たし、一瞬、私は現実ではない感じがしました。今までどのくらい他のバンドのライブを見に行き、これがもしKula Shakerだったらと想像したでしょう。今、彼らは帰って来て、そして私は理解しました。私は笑い、踊り、すべての心配事は私の頭から突然追いつめられました。待ち遠しかったのは、この瞬間、この時、お気に入りのバンドと一緒に時間でした。彼らを生で見るのがどんなだったかを皆に話したのを覚えています。説明しようとしたけど、言葉には置き換えられません。経験しなくちゃ、そこに居て、雰囲気を感じるの。彼らを見て、Crispianのギターの弾き方を見て。それがすべて。それより良いものがあるはずがありません。

もしブートレグがなかったら、セットリストは絶対に説明できません。録音したのを聴くのはいいわよね、多少は（記憶 / 感覚を）引き戻すわ。

彼らは新旧の曲たちと、思いがけない驚く曲いくつかとをうまく混ぜて演奏しました。「今日が13日だから、13曲演奏するって決めたんだ」とCrispian。ほら、また言うてるわ。もっと多かったかもしれないけれど。“Second Sight”、“Out on The Highway”、“Dr Kitt”などの曲をイングランドの首都で演奏するのは今回が初めてだった。私はThe Doorsの“Peace Frog”がとてもよく調和していて特に好きでした。その曲だけ、Crispianにはカンペが必要だったようで、歌詞が書かれた紙を足元に置いていました。サプライズには、私が大好きな“Ballad of a Thin Man”と、“Temple of Everlasting Light”も含まれます。最高！最後のアンコールに残した“Tattva”、“Hush”、“Hey Dude”そしてもちろん“Govinda”。少し残念だったのは、バンドが最後の曲“Govinda”を終えてステージを去った途端に観客たちが盛り上がり始めたことです。私？私は笑い続けていました。Kulaワールドに戻ってこれてとてもうれしかったわ。そして、まだ終わってないの。2日後にはまたライブがあるの。私は空き日で、くつろいだり、観光したり、買い物をしたりしたけれど、ほとんどをパブで過ごしました。イングランドに神のご加護を。



私たちはBush Hallに早めに着きました。私は、私のボーイフレンドのSebastianと、Sarah、ファンジン仲間のDanと合流しました。Danと私はHoxtonでのライブで大失敗したので、ひとつのとても重要な任務を完了しなければなりませんでした。それは、このファンジン用にメンバーヘインタビューすることです。私たちは、メンバーそれぞれへの質問をずっと集めていました。そして、今回は成功する見込みでいっぱいです。

実を言うと、ライブが始まる5時間も前からライブハウスの前で立っているのはすごく苦痛です。でも、恐らくこれが真のファンにするんだわ……。結局、長らく待っていたことは報われました。彼らは次々と到着しました。最初はSimon、彼はLondonみたいな街で、バンドのバンを駐める駐車場を探すのがどんなに嫌か、不満を言っていました。そのすぐ後にPaulが現れて、機材を降ろすのを手伝っていました。Paulが、私たちが少しおしゃべりできた最初のメンバーでした。その後Alonzaがいくつかの質問に答えてくれました。そしてSarahのおかげでHarryとも話しをすることができました。みんななんて素敵な人達なんでしょう！ただ1人、まだ行方不明なのはCrispianです。結局のところ、それがただひとつのがっかりする出来事でした。もっとも、たとえ私たちが努力しても、彼を捕まえることはできなかったでしょうけれど。

その夜、Kulaがステージに現れると、私たちの残念な気持ちはすぐに薄れました。セットリストはHoxtonのときと似ていました。このライブハウスはとても大きくて、彼ら

がステージに上がる頃には、サウナのようになっていました。でも私たちは暑さをものとしなくて新旧の曲と一緒に歌いました。最初、Crispian に少し違和感を感じました。きっと具合が良くなかったんでしょう。でも彼はますます演奏に入り込んでいきました。観客は“Hey Dude”、“Hush”で熱狂し、そしてアンコールでは、バンドが「ありがとう」と言いたいかのように聞こえた素晴らしい延長バージョンの“Govinda”が始まりました。それは正しく、完璧なロンドンでの時間の、完璧なエンディングでした。

SETLIST HOXTON:

- 01 Sound Of Drums
- 02 Second Sight
- 03 Die For Love
- 04 Great Dictator (Of The Free World)
- 05 303
- 06 Ballad Of A Thin Man
- 07 Out On The Highway
- 08 Temple Of Everlasting Light
- 09 Peace Frog
- 10 Dr.Kitt
- 11 Tattva
- 12 Hush
- 13 Hey Dude
- 14 Govinda



※誰かが私のささいなレビューを読んで奮起した場合に備えて、警告しなくてはなりません。もしあなたが本当に Kula のライブに行こうと思立ったなら、それには中毒になる恐れが大いにあります。そしてこの中毒には、あなたがもしイギリスに住んでいないならば、とても高くなります。でも私はあなたになお助言します。行きなさい！ これ以上の中毒はありません！



Bristol review

あの夜のすべては、イングランドの雨の中、パティントンからブリストル行きの列車に乗り込むことから始まった。ブリストルに着いて、何気なく駅員に終電の時間を聞いたら、「11時」と投げやりな返事が返ってきた。ちくしょう、ライブはだいたい11:30までには終わらないのに。僕は寝床と朝食を探そうとしたが、まるで聖書の中のキリスト降誕の場面のように、見つからなかった。

それから僕はロンドン行きのバスを見つけたが、朝の4時まで便がない。重い気持ちで切符を買った。ライブの興奮を消すのに、4時間も寒いバス停で待つこと以上のことはないよ！ とにかく、僕は港にある、ポートになっている会場へ向かった。中でウィスキー&ソーダをサクッと飲んでから、入場を待つ列に並んだ。7:30に開場、僕は前方の良いポジションをキープした。そして、たぶん近年僕が見た中で（実際にはこれまでに）一番ひどかったであろうサポートアクトに耐えた。キーボード弾き語りの男性で、演奏した中の1曲は“Dolphins are beautiful”。もう十分だ！ 8:50頃、メンバーがステージに現れた。彼らは全員インフル

エンザでダウンしているにも関わらず、完璧に目がくらむようなセットを演奏した！ 彼らの言葉で言い換えれば、「僕らは魔女たちの集会で呪われてしまって、腺ペストにかかっているんだ。でも今彼女たちと交渉中だから直に良くなると思うよ」！

彼らは、最も壮大で、すべての古代異教像、うなるギターリフと連打するドラムスのエネルギッシュなバージョンの“Sound of Drums”からライブをスタートさせた。Crispianの声はかすれて少し具合が悪そうだったが、彼らの演奏はとても力強く、それは全く問題ではなかった！ そしてCDバージョンよりもロックで生き生きとした、“ちゃんとした駐車場”風ではなく、より“ガレージ”風な“Second Sight”が急に始まった。

満員のライブハウスに小さなステージ、この状況を報道的な俗語で“intimate”と言うだろうと言うだろう。実際に、HarryとAlonzaは2つのモニターの後ろに押し込まれていて、もし上階にいたら少しも見えなかっただろう。次に“Die

For Love”が演奏された。僕から見ると、ステージ上はとてくつろいでいるように見えた。いわば彼らのグルーヴの基礎が築かれたのだ。

続いて、たぶん僕のあまり好きじゃない曲であろう“Great Dictator of the Free World”、すぐに続いて、いつもとてもヘビーで獣のように活気のある“303”。この曲はいつも観客をつかみ、ほとんどセットリストから外れない！

次の曲は“Ballad of a Thin Man”、今回のツアーでやるなんて思ってもいなかった曲だ。しかし彼らはまんまとやってのけた。それ自体、並々ならぬ妙技だ。その上、ギターソロは特に素晴らしかった。この曲の後のお決まりのブレイクの時、観客の中の誰かが「Be Merciful」と叫んだら、とても驚いたことに、バンドはその曲を演奏した。彼らが間違えたように、それほどリハーサルはしていなかったようだ。この曲は最後に演奏するような類いの曲だろう。そして僕の見解では、必然的に“I’m Still Here”の後を追う曲だ。

その後彼らは“Out on the Highway”から通常のセットに戻った。ものすごいライブの本当の始まりはここからだった。強烈さと軽快さが同時にある、それはとても壮大なナンバーだった。そして“Temple of Everlasting Light”。この曲は、どれほど 60’s なサウンドかという印象を与えた。疾走するリズムと閑静なセクション、激しいセクション、そして不意なエンディングをあわせ持っている。

次に実に 60’s な（厳密には 1970 年）The Doors のカバー曲、“Peace Frog”（アルバム『Hotel Morrison, Hard Rock Cafe』に収録）が続く。このオリジナル曲はチェックする価値がある！ 音楽的にはとてもしっかりしていたが、Crispian は歌詞をきちんと覚えられていなかった！ Harry は多くのファンキーなハモンドプレイでこの曲を本当に彼のものにしていた。そして切れ目なく“Dr Kitt”へ続く。最高に上質で、恐らくすべての Kula の新曲の中で僕の一歩のお気に入りかもしれない。

それから、時間とともに、より Beatles 風なサウンドになっていっている、お決まりの“Tattva”。Crispian がハーモニカを取り出し、ハレルヤをやったのが特に良かった。合うはずないと思ったけど、上手く合っていた！ そして“Hush”

では観客が叫び、ダイブする人さえもいた！ 彼らはステージを離れたが、まだ“Govinda”をやっていないので、また戻ってくるとみんな分かっていた。

少し経った後、彼らはステージに戻り、“Super CB Operator”を演奏した（少しも CD 通りではなかった！）。これは順当に終わり、Alonza のファンキーなベースでいつもよりも長いイントロの“Hey Dude”が続いた。



彼らは「Fairyland」1 曲のためにスペシャルゲストをステージに招いた。他ならぬ Don Pecker だ。Don が Kula Shaker としてバンドと一緒に生演奏するのは今までで初めてのことだ！ CD バージョンからイントロがなくなっていたり、すごくフォーキー（陰気なフォーク）だったことを差し引いても、良い演奏だった。僕らが知るものよりもロックだったが、上手くいった。Crispian はステージ袖から見ていただけだった。Don がギターを Crispian に返すと、ついに“Govinda”が始まった。僕はイマイチな“Govinda”を今までに一度も聞いたことが無い、そして今回もがっかりなんて

しなかった！ 夜の終わりになんてすばらしい曲、まさしく彼らがやったことだ。

ライブの間中、僕は時計をずっとチェックしていた。アンコールの時には、終電に乗れるかもしれないと思ったので、早めに会場を出ることはしなかった。“Govinda”の半分を過ぎた時点で、じわじわと後ろに下がった。“Govinda”の最後のコードが鳴ったとき、僕は駅に向かって走り出した（文字通り）。そして、10分の待ち時間付きで終電に乗ることができた！ 後で考えると、急な予定変更、ポスター、週刊誌にサンドウィッチは、かなりの距離を走るのにまったく理想的でない！

全体の感想としては、バンドは機嫌が良く、ステージでは共に目に見えて楽しんでいた。MCでの冗談がほとんど残りのツアーと同じだったとしても。前に6回演奏している曲を「新曲だから、まだやったことがないんだ」って言うかい？

良いライブとは何なのか批評出来るから、ひとつのバンドを短い間隔で数回見るのは面白いことだろう。今回、彼らはさらにツアーに入り込み、より良くなった。僕にとって今夜のライブは、たとえ実際には音が良くなかったとしても、確実にこのツアーのハイライトだった。僕はドラムの正面右側に立っていて、バスドラが僕の頭の近い位置にあったんだ。3メートルは離れていたけれど。でも不満は言うべきじゃないね、終電で家に帰れたんだから。完璧な夜だった！

SETLIST:
Sound Of Drums
Second Sight
Die For Love
303
Ballad Of A Thin Man
Be Merciful
Out on The Highway
Temple Of Everlasting Light
Peace Frog
Dr Kitt
Tattva
Hush

Encore:
Super CB Operator
Hey Dude
Fairylend Feat. Don Pecker
Govinda



iTunes review



僕に限って言えば、このライブを殆ど見過ごしていた。スウェーデンから来た友達とレコーディングをしていて、スタジオでベースラインについて長時間議論していたからだ！

だが、7月15日の土曜、メールをチェックしたら、次の月曜にある Kula Shaker のフリーライブに関するメールが来た！ ゲストリストに入れる抽選の締め切りはその日だった！ 速攻で名前とかを入力して、ライブのチケットが当たったってメールが来るか見守った。何が特にスペシャルかって、僕の友達は実際に Kula Shaker の大ファンで、まだ一度も Kula のライブを楽しんだことがなかったんだ。言うまでもなく、僕はその友達に Kula ライブを初体験させた！

それで僕らは、月曜はスタジオを早めに出て、急いで家に戻って軽く食事を済ませ、9時間もスタジオにいたせいで臭い服を着替えて、イングランドの雨の中を、ICA に向かってストランドを歩いていた！ そのライブは ICA であったんだけど、会場は適正なサイズで、最前列のいい場所を確保してから何人かの Kula ファンの友達に会った！ サポートバンドは Loney と Dear で、僕は全然だったけど、友達は気に入ってた。

とにかく、9時を過ぎて会場が埋まってから、儀式用の豪華な装飾品で飾り立てた2人のシーク教徒が、2つの大きなドール（※訳注：インドの民族楽器。太鼓）を持ってステージに出て来た！ 彼らが黒と白のプーマのスニーカーを履いていたことが、余計目を引いた。PA から緊張感が

渦巻くインド音楽が流れて来て、彼らがドラムを叩き始め、数小節の後に Kula が登場し、“Sound of Drums” になだれ込んだ。



物凄い演奏だった、もの凄く 1960 年代後半のサイケデリック風だった！ メンバーはみんな調子が良く、セットリストをちょっと膨らませて、曲順を違えてた。でもそれはそれとして、演奏は悠然としていて、どのパートも Crispian のギターの背後に上手く組み込んであった。その上、音自体も凄く凄く良かった、いい音響だった。音響に関わってた人は、みんないい仕事をしたね！

新しい（新しめの）曲はよくリハーサルされていて、他の昔の曲と並んでも場違いなものには思えなかった！ 僕にとってこのライブのハイライトは、“Song of Love/Narayana” だね、この曲をライブで聴いたのは初めてだったんだ。ライブアースでやるつもりだったんだけど、出演依頼がなかったからやらなかったんだ、と冗談めかして紹介された！

このライブは iTunes で販売されることになってたから、ライブが半分くらい終わったところで、特別なアコースティックセットをやった。“Shower You Love” と “Dictator”、これは Alonza と Crispian（凄くちっちゃいギターを弾いてた）だけでやった。可愛らしいパフォーマンスで、奇妙なことに、“Dictator” はちょっとカントリーっぽかった。そして、素晴らしくて奥深いバージョンの “Be Merciful” でアコースティックパートが終わった。

Alonza と Crispian はそれぞれベースとギターを持って、適切なゆったりしたテンポで “Dr Kitt” を演奏し始め、それは素晴らしいギターソロのクライマックスに達するまで、徐々に盛り上がって行った。これぞ正真正銘、Kula Shaker だ！そして曲は “Tattva” に変化し、それによって、2 人のドルのドラマー、Johnny Kalsi と Jas Daffu がステージに再登場して思いっきり楽しんだ。さらに、Crispian がアウトロでマウスオルガンを吹いた。カッコイイはずがないのにカッコ良かった！ セットの最初のパートを壮大なバージョンの “Govinda” で適切に終えた。Kula はステージから去ったけど、促されて、実にフォークなバージョンの “Jerry Was There”（でも歌詞には凄く変なスター・ウォーズの影響が見て取れたけど）をやるためにステージに戻るようになった。そして、“Hey Dude” でライブを締めくくった。



みんなが知る限りでは、ライブ全部が iTunes で販売されることになっていたが、たった EP ほどの長さだけが近々販売されることが明らかになった！ これを書いている時点で、まだそれは販売されていない（※訳注：現在、UK の iTunes Store のみで、4 曲が発売中）。

このライブへの無料招待には含まれてなかったことだけ、参加者全員に iTunes カードもくれた。このライブの曲が iTunes で販売された時に買えるように、10 曲のフリーダウンロード券が配られたんだ。でも僕は音楽マニアだから、このライブの曲が販売されるずっと前に使っちゃった！

全体的に、成熟した素敵な選曲だった。みんな、Kula が調子が良かったのを大体感じたかもね、何しろ後世のた

めに録音されてるって意識があったからね！ イングランド
周辺で Kula を見るためにたくさんの時間とお金を使った後
で、僕の地元でタダで Kula を見れたのは嬉しいサプライ
ズだったよ。その上、Kula の音楽の真価が分かる誰かを
Kula のライブに連れて行けて嬉しかった！

Set list

1. Sound of Drums (feat Johnny and Jas)
2. Out on the Highway
3. Second Sight
4. Die for Love
5. Temple of Everlasting Light
6. 303
7. Song of Love/Narayana
8. Shower Your Love (Acoustic)
9. Dictator fo the Free World (Acoustic)
10. Be Merciful (Acoustic)
11. Dr Kitt
12. Tattva (feat Johnny and Jas)
13. Hush
14. Govinda

Encore

15. Jerry Was There
16. Hey Dude



Fuji Rock

今年もフジロックに Kula が来ると知ったのは 3 月だった。The Jeevas でも 2002 年、2003 年と 2 年連続出演しているので、Kula も 2 年連続出演を秘かに期待してはいたが、実際出演が決まったと聞いてそれはもう本当に嬉しかった！ 今年もフジで Kula が見れる！

そもそもフジロックとはどんなフェスなのか？ 日本国外に住む大半の人は、名こそ知れ、体験したことはないのではないだろうか。フジロックは山の上で開催されているが、その山は富士山ではない。会場は新潟県にある苗場山である。ならば何故フジロックと呼ばれているのか？ 理由は実に単純で、1997 年にこのフェスティバルが初めて開催された地が、富士の天神山スキー場だったからである。翌年 1998 年は東京で開催され、1999 年から現在の苗場に会場が移されたが、フェスはフジロックフェスティバルとして愛されている。ところで、フジロックに関してあまり知識を持たずに来た人は、辺りを見渡してもなかなかゴミを見つけられないことに驚くだろう！ フジロックは世界一クリーンなフェスティバルを目指し、観客、スタッフ、アーティストが一丸となり、作り上げている。

そして一つ断っておかなければならない。日本では、ステージ上のアーティストを撮影することは禁じられている場合が多く、フジでは一切禁止されている。そのため、Kula の写真は一枚もないことをご了承頂きたい。

Kula Shaker は、昨年、レッドマーキーと呼ばれる、屋根のある小さなスペースのヘッドライナーとして登場した。キャパは 5,000 人。再結成した Kula を一目見ようとかけつけた観客で溢れ、入場制限が出るほどの大混雑振りだった。同年 4 月、再結成して間もない彼らをイギリスで見たときはまだ若干のぎこちなさを感じたが、この日の彼らは完璧だった！ 「Kula が帰って来た！」その場にいた観客は皆、そう感じたに違いない。そして今年は、フジロック最大のステージであるグリーンステージ（キャパ 40,000 人）



に登場だ。まだ明るい時間だったのは少し残念だが、開放的な空間で Kula が見れることにワクワクしていた。

予定より 5 分早い 15:45 にインド音楽の SE が流れ、Kula の出番を告げた。彼らの演奏を見るのは去年のフジ以来だ！ そして SE が終わる頃にメンバーが登場、1 曲目の「Hey Dude」のイントロが始まり、会場は歓声に包まれた。1 曲目にこの曲を持って来たのは挨拶代わりだろうか。初めて彼らを見る人も多いだろうし、この時間、この会場でのステージの幕開けに相応しい選曲に思えた。あいにく晴天ではなかったが、Crispian の歌に合わせ、「catch the sun!」と大勢の観客が空へ手を伸ばし、太陽をつかもうとしていた。そして私は間違いなく、その時、その瞬間、そこにあった“何か”をつかんだ。

2 曲目「Out on the Highway」に続き、Harry がベートーベンの「運命」のイントロを弾き始め、Crispian の「Do you want to see the man behind the mask?」の声と共に「Second Sight」、そして「Die For Love」と続く。「Die For Love」は私のとても好きな曲で、特に“You don't have to pray for the death of your enemies, we'll defeat them with a song”という歌詞が非常に好きだ。歌詞に込められた思いと Crispian の感情的なボーカルが相まって、とても胸を打つ。

続いて「Temple of Everlasting Light」、1st アルバムに収録されているにも関わらず、直近の UK ツアーで、11 年の時を越えて初めてライブで演奏された曲だ。途中、歌詞を「If I wait another day to travel to Fuji!」と替え

ていた。「303」が終わった時、Crispian がギターを頭上に投げ上げヒヤリとしたが、見事に受け止めた！「Great Dictator (of the Free World)」は、実は、特別好きな曲ではなかったのだが、ライブでは非常にカッコ良くアレンジされていて引き込まれる。プロモーションで来日した際に、ラジオ番組で披露してくれたアコースティックバージョンの同曲も素晴らしく、とてもライブ映えのする曲だと思った。「Kula Shaker の真価はライブを見るまで分からない」という良い例だろう。

残念ながら、私の位置からは Paul はまったく見えなかったが、聞こえて来る音から Paul のドラムを叩く姿が想像出来た。Harry はステージ下手側前部で堂々としたプレイを見せていた。Alonza は、Kula を支える魅力的なフレーズのベースラインを力強く奏でながら、素晴らしいコーラスを聞かせてくれた（彼のコーラスも Kula の魅力の一つであることは間違いない!）。ライブの間中、私の目は Crispian のギターの弾き様に釘付けだった。彼のギターが大好きだ。一心にギターを弾く姿は、見る度に、彼がギタリストであることをしみじみ感じさせる。インタビュー（※）で、「フジの観客が新曲をまったく知らなかったら、僕の長い長いギターソロ入りで、イーグルスの“Hotel California”を1時間やるよ」と冗談を言っていたが、個人的にはそれも是非見てみたい！

「Strangefolk」が流れ、引き続き「Song of Love/Narayana」が始まる。途中のギターアレンジがとてもクールだ！Crispian が1フレーズを軽く奏で、次に始まる曲が「Shower Your Love」だと分かった。後日ソニーのサイトで発表になったセットリストには、「Be Merciful (Shower Your Love)」と記載されていたが、その場の判断でこちらの曲を選んだのだろうか。どちらも大好きな曲なので、どちらが聞けても嬉しかったが、あの場面では、「Shower Your Love」の方がふさわしかったように思える。とても優しく美しい曲で、聞く度に温かく切ない気持ちになる。

そして、ワウギターが印象的な「Dr Kitt」が始まった。新譜の中で私がライブで聴きたかった曲の1つだ（「Fool That I Am」と「Hurricane Season」もいつか聴けるだろうか？是非聴きたい!）。そして「Tattva」の神秘的な

サウンドが辺りを包む。この、「Dr Kitt」から「Tattva」へ続く曲順が気に入った。そして、「Hush」では観客が大きくジャンプし、全身でライブを楽しんでいた。「Govinda」のイントロが流れると、これが最後の曲であることを察した観客が、どよめきの混じった歓声を上げた。Kula に割り当てられた時間は1時間。もっと見ていたかった！名残惜しさを感じながら「Govinda」を合唱し、開始から丁度一時間後の16:45、Kula のステージは幕を閉じた。

本当に素晴らしいステージだった！フジに来てくれて、そして、最高のライブをありがとう！

Setlist:

1. Hey Dude
2. Out on the Highway
3. Second Sight
4. Die for Love
5. Temple of Everlasting Light
6. 303
7. Great Dictator (of the Free World)
8. Strangefolk
9. Song of Love/Narayana
10. Shower Your Love
11. Dr Kitt
12. Tattva
13. Hush
14. Govinda



※ excite gear

<http://www.excite.co.jp/music/gear/article/interview/video/COMMENTFROMKULASHAKER200707/>

Gig photo special







Guru Madness

DOWN THE RABBIT HOLE



やあ、読者のみなさん、また会いましたね。当誌は、また別の独占コラムを手に入れるために、鏡の内側へ、そして深い深いうさぎの巣穴の中へ、地の底をものともせず勇敢に立ち向かいました！

それでは……

Guru Madness は、世の中の自由を愛する君たち全員に最新情報を与えたい。前回のコラムで述べたように、ゴルフコースが聖なる地、至高の神 Krishna の生誕の地であるインドの Brindavan に造られている。この Guru Madness が好機に達し、現在、ロックスター VS 世界の指導者という前回のチャリティーマッチ計画が拡大されたからだ。チームは Meatloaf (いや、かつてはそう呼ばれていたが、肉食主義になってからは Nut loaf と呼ばれている!) と Alice Cooper、そして Dodger Mills で構成されているロックスターチーム VS 中国、ビルマ、日本、そしてアメリカからの世界の指導者たちだ。

これは全関係者にとって好ましいことだろう。何故なら、ゴルフは、ロックスターと世界の指導者の両者にとって (両者とも、どでかいエゴで名高い)、非常に有益な超越的な娯楽だからだ。多くの人が僧侶の代わりにゴルファーになるのは魅力である! ゴルフの神聖さは、プロット全体がバガヴァッド・ギータの寓意である映画、「バガー・ヴァンスの伝説」によって、より一層証明されている。

だがゴルフはもうたくさんだ。前回のコラム以来、Guru Madness の身に起こった最も敬虔なことは何だったのか?

Guru Madness は、ミュージカルデュオ Hobby Horse と共にイングランドの南西部でライブ活動を続け、新曲を制作中である。来年の Hobby Horse のニューアルバム情報に耳をすまし、目を離さないように。注目すべきは、Hobby Horse の CD、ライブの売上のすべての収益は Tricky Warren Horse と Pony Rescue Centre へそのまま届けられていることだ (さあ、小切手を出して)。前回のコラム以来、Guru Madness は別の元競走馬を、13 メートルの廃屋の中から救い出した。彼はうさぎの巣穴の先で最も幸せな人だ!

また Guru Madness は、10 年ののち、Crispian の素敵な紹介による Kula Shaker との公式ライブデビューのために、うさぎの巣穴から飛び出した。この問題になっているライブは船上で行われたので、唯一これを可能にした。というのも、Guru は、まだ彼の神聖な足を陸地へ置くことが出来ないからだ。

不思議に思ってるといけないから言うが、Crispian はやはり Guru Madness をゴルフで負かさねばならない！ Guru Madness の視力が衰え、関節炎が彼を蝕むにつれ、Crispian は勝てるかもしれない。だが Crispian は、彼が最盛期の間は決して勝つことは出来ない。それにもかかわらず、Crispian は Guru Madness に勝てる日を待ちこがれている。

Guru Madness は Kula を非常に誇りに思っており、彼らの良き師であることを誇りに思っている。Guru Madness はまた、2008 年の素晴らしい予想を述べる。何故なら 2008 年は子年であり、Crispian は子年生まれである（※訳注：実際は丑年生まれのはずですが……）。また 2008 年は合計すると 10 になり（ $2 + 0 + 0 + 8 = 10$ ）、バンドにとって非常に神秘的な数字なのだ。Guru Madness は、Kula が 1 位を取った曲で急に忙しくなるという神から授かったビジョンを持っており、それはこの年に起こるだろう……これは天啓である！ Guru Madness は、結婚式や葬式、洗礼式、そしてバル・ミツバー（※訳注：ユダヤ教の 13 歳での成人式）など、Kula Shaker と共にゲストとして演奏出来る場所を楽しみにしている！

ストレッチリムジンの運転に関してだが、この夢はアヴァロンの霧に消えようとしている。Guru Madness の健康状態が良くないこと、そして Kula が自動車保険に入れなかったからだ！ だが彼は、彼の良き友である、運転席の Simon Roberts (Bucky で高名) と共に、副運転手、もしくはナビゲーターになるかもしれない。

Pecker 氏が、Bucky の一人、Joff Winterhart（※訳注：Paul の実弟）と、“Won't Never”という名前で、バースの Moles club でライブを行ったことも書かなければならないだろう。ライブは大好評だった。そしてこれは、働き詰めの多くのプロジェクトのうちの一つに過ぎない。

そろそろ、Guru Madness と Don Pecker が同一人物であることに気づいてるかもね！

LONG LIVE THE MANTRAS!
HARE KRSNA

GURU MADNESS 2007

Interviews

Paul

“RIVER DEEP, MOUNTAIN HIGH”

SF：最近のツアーはどうですか？

順調だよ。短期間に国内を回るだけだね。

SF：ミニツアーみたいなものですか？

そう。いくつかは去年回ったところだね、ノッティンガムとかマンチェスター……本当にマスコミのためだけにだよ。マネージメントオフィスに所属していないから、結構多くのことを僕ら自身でやっているよ。

SF：最近の音楽業界の状況についてどう思いますか？

僕は今の音楽業界にはあまり着いて行けないな。ただドラムを叩くのが好きなだけだから、そういうところからは逃れたいよ。でもインターネットやその他色々なことに関してどうかというと、明らかに違う意見だね。例えば、Kula Shaker に関しては、僕は音楽的な面でもその一部だし、個人的な繋がりもある。でも、ビジネス面のことはよく分からないよ！

SF：今回のアルバムの制作は長引きましたか？

いや、すごく短かったよ。認識しているのは、僕らがスタジオでひどく苦しい2ヶ月を過ごしたということ。でも長引きはしなかった。ちょっとセカンドアルバムの時みたいなことをしたよ。CrispianとAlonzaにとっては仕上げが難しかったみたいだね。実際に「今すぐやめよう」って言ったりしていたけど、今年は多くのことはしていないよ。僕はたった1、2日演奏しただけだったしね。ほとんどクリスマス前に終わらせていたよ！クリスマスからは、ただ形を整えていただけ。

SF：完成するまでに非常に長い時間がかかった前作『PPA』と比べて、このアルバムレコーディングはまた違った経験だったのでしょね。

そうだね。Henryは前はいなかったし。でもテムズ川のGilmourのボートでのレコーディングという点ではHenryも楽しめただろうね。あそこはすごくオシャレだったから、



僕らもドレスアップしたな。船も漕いだし。実はテムズ川で泳いだんだよ。

SF：本当ですか？ うまく泳げましたか？

ああ、リッチモンド側からトゥイッケナム側まで泳いだよ。

SF：そこはとても幅が広くありませんか？

たぶん、50ヤードくらいかな。

SF：たっぷり5分間は掛かったでしょうね。

わからないけど、その時は人生について考えたよ。

SF：半分まで行った時どうでした？

(水流に) 流されるって感じじゃなかったけど、水をコップ1/8でも飲み込んでたらやばかったかもね

SF (Daniel)：僕もロンドンのある池で泳いだことがありますよ。“この水はかなり汚そうだから、口は閉じていなきゃ”って思いました。

どこの池？

SF (Daniel)：ハイドパークにある池です。

サーペンタイン池か。

SF (Daniel)：はい、それです。見たところ藻があるか

らとても清潔そうだけれど、手が見えないくらいなので、すごく怖いですよ！

ハムステッドヒースの池で僕も泳ぐよ。あそこはとても良いんだ！ 2 週間前の晴れた日にもオーストラリア人の従兄弟と行ってきたよ！

SF：冬に泳ぎに行ったことはありますか？

うん、冬にその辺に行ったことはある。

SF：筋金入りのスイマーなんですね。

ああ、以前はほんの少しの冷たい水たまりでも、見たら飛び込んでいたよ。僕はイギリスの北海岸、12 月の北部海で泳いだんだ。そこは、空気がすごく冷たいんだよ。

SF：冷たくても水温が 2 ～ 3 度より下回ることはありませんが、それでもまだ冷たいですよ

ああ、氷点下にはならないね。極地の海で泳いでいたスイマー（Lewis Pugh さん）もいるし。彼の体温を測るとね、冷たい水に入ることを察して体温が上がるんだ、体は水に入ることを知ってるんだ！

SF：そうですね。さあ、質問に戻りましょう。再結成してから 18 ヶ月経ちますが、うまくいっていますか？

うまくいっているよ。面倒な 4 人が同じバンに乗っていたら複雑だけど。

SF：インタビューではいつもどんな質問をされたいと思っていますか？

どんな質問にも興味ないんだ。ファンジンには構わないよ、素晴らしいし。でもプレスやラジオ DJ、主流のメディアは僕の脇をすり抜けて行くけど。僕はこういうことやオンライン上でのことは良いことだと思っている。MySpace もね。ファンみんなと話をするのは楽しいよ。みんな協力的だし、良い人達だし。ちょっとした噂話でも聞きたいと求めてくるけど、ミュージシャンの言葉は世界中に広まるからね、それがいいことなのかは分からないな。

言いたいことは音楽を通して言うべきだと思うよ。僕はバンドが政治について話すことには賛成出来ないな。とは言っても“Q”（※訳注：イギリスの音楽雑誌）は読まない。興味が無いんだ。僕の好きなアーティストやバンドについても良く知らない。知っているのは、彼らは素晴らしい作品を作ったということと、少しのニュースの断片を読んだり、ライブの音源を聞か、または彼らについての小さな記事を読む

か。でも僕が大好きなアーティスト、Lee Dorsey や Led Zeppelin、彼らについて読んだことは別にして、彼らは常にどんなメディアにも現れなかった。僕が愛する人々は、メディアには出なかったよ、彼らについては何も知らないけれど、ミステリアスだよ。彼らを好きな理由の一部は、神秘感なんだよ！

SF：最後の質問です。Kula での今までで最も不思議な経験は何ですか？

最近かなり多くの不思議なことがあったよ。目立ったことのひとつは、98 年に Alonza と一緒にインドで山に登ったとき、ある会話を耳にしたんだ。「うわ、このバンド、この西洋のバンド、Govinda Jaya Jaya って歌ってるよ、Govinda って叫んでる」って、みんなで話していたんだ。僕は彼が Kula のことを話してるのに気付いて、“彼らは僕のバンドについて話して僕はそれを立ち聞きしてる、でも僕はそれに関して何もしてない、だって彼らは僕のことを知らないから”って感じだったよ。彼らは聴いていた西洋の曲が Govinda って叫んでるところのことを丁度話してたんだ、彼らはそれがただ信じられなかったんだ！

SF：では最後に、ファンみんなへのメッセージはありますか？

アルバムを気に入ってくれたらうれしいよ。どんな状況で聞いたとしても。それがリリース前でも、インドの山の上でも、クリスマスでもね。楽しんで欲しいな。秋はツアーに出て、大きな会場でもやるよ。もし今回はチケットが買えなかったとしても、そのうち会えるよ。それまでに上手くまとめておくよ！

Alonza

“DRINK TEA, BE NICE”



SF：今回のツアーはいかがですか？

もうツアーの終わりだね。いや、楽しいよ。演奏しに出掛けるにはちょうどいいね、何ヶ月かやってなかったからね。アルバムをレコーディングした後にツアーに戻ったのは本当に良かった。Paul の演奏は狂っていたよ、Paul がきつと話しただろうけど、僕らはスタジオワークで忙しかったよ。でも Paul はずっと親指をいじっていたよ！ 今回のツアーがあまり長くなかったことが残念。でもその反面、僕らは長いツアーには向いてないけど、毎回ライブの後はヘトヘトになるよ。

SF：深夜は何をしているんですか？

ただずっとドライブ（移動）しているだけだよ。

SF：そのような深夜、早い出発と高速での長時間のドライブのために、何か役に立つ二日酔い対策は見つかりましたか？

たくさん紅茶を飲むことだよ。僕は本当にアルコールは飲まないんだ。僕は良い酒飲みじゃないね。

SF：あなたにとって、パーフェクトな紅茶とは何ですか？

今までで一番の紅茶は何だったのでしょうか？

一番を考えているけど、難しいね。家で飲む、その日最初の一杯かな！

SF：実に習慣性があるものですね。

そうだね。飲み過ぎると神経質になったり、中毒になったりするところがあるコーヒーとは似てないね。なのに（中毒性があるわけじゃないのに）、紅茶はいくら飲んでも物足りないんだ！

SF：今回のツアーで“Revenge of the King”を演奏しない理由は何があるのですか？

わからない、ただそこから僕らが進歩しただけだと思うよ。僕らは今回のツアーに十分な曲目をなじませることにずっと悩んでいるんだ。今回みたいな小さい会場で長過ぎるライブはみんな嫌だろうからね。これは新しいアルバムの曲と、以前の曲との良いバランスのケース。アルバムの曲の中で今回のツアーでやってない新曲がたくさんあるんだ。多分、次の秋のツアーでやるよ。

SF：ニューアルバムのレコーディングを終えたわけですが、あなたにとってのベストトラックは何ですか？ レコーディングしていて一番楽しかった曲は？

“Hurricane Season” だね。僕らはあの曲を演奏するのが好きなんだ。すごく野心的な曲だよ。ハリケーンを対処しに海へ出て行く水兵に関する曲で、それら全ての比喩的なものは、人生のハリケーンについてでもあるんだ！

SF：今までやったライブの中で、どれが一番でした？

うーん、わからないなあ、選べないよ。

SF：“Second Sight”が Acid Jazz レーベルのコンピレーションに収録された経緯は？

この曲は僕らが解散前に作った曲なんだ。僕が Paul とあと2人でやっていた Shep というバンドで、この曲で遊んでいたんだ。それを（コンピに）使ったんだよ。僕らはそれを少しロック調にしている、Shep でやるためのただのデモだっ

ただだ。

計画中のコンピレーションアルバムに提供したい曲があるかどうか、僕らに尋ねてきた Acid Jazz レーベルの人を知ってた。それには水晶のような素晴らしい曲たちや貴重なものがあつたから、彼はそれにガレージ・サイケ・チューンを入れたかつたんだ！ だから曲を書いたんだ。彼はもっと曲はないかと聞いてきたから、“Second Sight” のデモを聞かせたら、すごく気に入って、この曲に決めたんだよ。でも新しいアルバム用に今録り直しているよ。そうする価値があるんだ。

SF：ニューアルバムにはフォークソングは収録されますか？

うん、2 曲あるよ。

“Persephone” はかなりフォークな曲だよ。僕らには秘密の集まりがあつてね、Harry、Paul、Crispian と僕で、Potters って呼んでるんだけど、ろくろの周りに集まるんだ。陶器用のチンキ剤を使つたりね。最初は冗談だったんだけど、それは実にぞっとするよ。

SF：あなたがそれを私たちに話した今、私たちを殺さなければならぬですか？

(不安な沈黙)

SF：分かりました。じゃあ、アルバムが完成するまでにトラブルがあつたという様々な噂を聞きましたが、それはただの噂でしょうか？

うーん、(アルバム制作は) 凄く時間がかかつたんだ。なんでかはわからないんだ、レコーディングは去年の 9 月から、Tchad と Real World スタジオで始めたし、すべて順調に進んでいたんだ。何を望むのかが確かでなかつたとても長い時間に耐えたのは、ちょうどミックス作業に差し掛かつた時。僕らは思ったんだ、畜生、こんな曲があつた方がいいなつて。僕らはそれからより多くの曲を持ち込み始めたんだ。それはやる価値があつたことだけど、実を言うと、昨年にはほとんど終わつていたんだ。でも結果として、それが良いアルバムを作つたと思うよ！

SF：今回のアルバムに入らなかつた曲もたくさんありますか？

あるよ。

SF：それらの曲は日の目をみることはありますか？

きつとあるよ。いつもそうだよ。カップリング曲で出ている曲もいくつかあるよ。

SF：シングルを出す予定はありますか？

うん、イギリスで “Second Sight” を出す。プロモーションビデオも撮り終わつたところで、そのビデオの中で僕は女装したんだ、催眠術をかけられた白痴の息子である Paul の母親役でね。Harry は Watson の格好をして、トランス状態の中でウサギと戦うんだ。面白いよ。これは僕らが演奏しない最初のビデオになつたね。

SF：他のプロジェクトの話はありますか？ 例えば Shep とか。

家族のことがあるから時間が取れないんだ。でも妻と一緒に多少音楽をやっているよ。でもほとんどは家の周りをぶらついているだけだ。

SF：イギリスと日本以外へのツアーの予定はありますか？

うん、来週日本へ行くよ。秋にはイギリスでのツアーも組んでいるし、できればヨーロッパツアーもやりたいね。ベルギー、オランダ、ドイツ、スペイン、ベネルクス……フランスはないけど、ツアーに出るよ。

SF：では今後数ヶ月間は大忙しになりますね。

そのうちに分かるよ、CD がどうなるか次第だし。CD が好評だつたことを意味するから、忙しい方がいいな。

SF：とてもコアなファンがいるような日本でのツアーは変な感じがしますか？

彼らはとても礼儀正しいけど、度を越しているね。

SF：まったく違う話ですが、休日に 3 枚のアルバムしか聞けなくなつたとしたら、何を選びますか？

うーん、難しいね。Love の『Forever Changes』と……君だつたらコンピレーションを選ぶんだろうね、あらゆる良い曲が聞けるだろうからね、言わば最高の部分だよ。Beatles『Abbey Road』……あとはわからない、たぶんインドの伝統音楽かな。

SF：音楽を始めたいと思わせたバンドはありましたか？

うん、The Who だよ。大ファンなんだ。夢中になった最初のバンドで、ベーシストの John Entwistle は本当に素晴らしいミュージシャンだよ。The Who の初期のアルバムは本当に良くできているよ。僕らの曲にも The Who の要素はたくさん入ってる。

SF：1年後はどうしていると思いますか？

わからないな、じきにわかるよ。スタジオに戻ってもう1枚アルバムを作ったほうがいいかな。今年は出られなかった

から、来年はフェスティバルに出たいね。

SF：たくさんの Kula Shaker ファンにメッセージを。

紅茶を飲んで、元気でいてください。



Harry

“INDIA – BUT ONLY FOR CRICKET MATCH”

SF:Kula に加入して1年半経ちましたが、いかがですか？

うまくいっている。みんな良い人達だよ。

SF：あなたは以前 (or 90 年代) は、Kula のファンでしたか？

ファンだったとは言えないな。でも間違いなく素晴らしい誘

いの電話をもらったよ！ 僕は「ああ、いいよ」みたいに答えた。僕の Kula についてひとつ覚えていることは、昔パブで働いていた時に、ラジオで “Hush” が死ぬ程かかっていたことかな。

SF：以前は The Kilometres というバンドにいたんですよね？

そう。

SF：Kula は本当にあなたをそのバンドから捕ったのでしょうか？

いや、僕らはまだ The Kilometres で活動しているんだ。あのバンドの特徴は、活動できる時にやるという、全員にとってのサイドプロジェクトなんだよ。この前マンチェスターで Kula のサポートバンドとしてライブをした The Dirty Feel というバンドは 3 ピースで、僕が加わると The Kilometres になる。楽しいライブショーだよ。

SF：何かリリースしましたか？

予定通りにアルバムを 1 枚ね。

SF：Kula に加わって『Strangefolk』のレコーディングするより前に参加したのは、そのアルバムだけですか？

いや、色々あるよ。Victor Davies というソウルシンガーのヨーロッパツアーで、たくさん演奏したよ。実は彼が僕に最初にキーボードをくれたんだ。僕はドラマーだったから、彼のサポートではドラムを演奏していたんだけど、キーボードプレイヤーがツアーの前に病気になってしまって、それで僕が引き継いだんだ。

SF：すごいですね、そんなに早く担当楽器を代われるなんて。

いやあ、リハーサルは 2 回あったんだけど、厄介だったよ。ずっとすごくナーバスになっていたのを覚える。

SF：あなたはバンド内ではまだ新入りですか？

いや、もう十分時間は経った。もちろん僕は新入りでいるつもりだよ、彼らにはそういう名残があったし、若干の浮き沈みもあったし、慣れるには時間がかかったよ。

SF：あなたはもうベジタリアンに転向させられましたか？

ほとんどね！　いいや、転向してないよ、試みるのは構わないけどね。

SF：Kula で演奏している曲で、お気に入りの曲はありますか？

新曲だと、好評のような “Dr Kitt”。プレイするのが楽しいんだ。でも不思議なことに、僕の曲じゃないけれど、“Hey Dude” は物凄く楽しいね。“Second Sight” もね。

SF：あなたの髭には何が起きているんですか？

バンドとして、よりエドワード 7 世時代の生活様式にするつもりなんだ、しかし髭は多くの努力が必要。Hercule Poirot がしていた網状の髭みたいなね。

SF：髭は、人々の好き嫌いが分かれるようなことのひとつだと思います。私が今までに会ったことのある髭が好きな女性は、ほんの数人です。

髭が好きじゃない人達はほとんどいないよ、実際にする人は数人かな。

SF：とは言うものの、良いバンドには全部、髭を生やしたメンバーが少なくとも 1 人はいますよね。髭を生やしているときの Beatles は一番良かったです。

そうだね、全員髭のカルテットだった。

SF：日本での旅はいかがでしたか？ Kula は向こうでは大人気なので、少し混乱しませんでしたか？

確かに。4 日間しかいなかったからというだけじゃなくて、寝れなかったし、ステージに押し出されたらただ人がたくさんいて、機材がどうなのかもよく分からなくて、あれはちょっとヤバかったよ。でもすごく良かったよ。日本のみんなは素晴らしかった。美しい場所だったし。日本に行ったのは初めてだった。

SF：インドへ行ったことはありますか？

おかしなことに、彼らが初めて僕にバンドに加わるか聞いて来たとき、僕はインドに行こうとしてたから彼らとリハーサルができなかったんだ。それは僕がクリケットの試合を見るためだったから、それが Crispian とは少し違ったけど、ちょっと皮肉だね。とても良かったよ。

SF：クリケットが大好きなんですか？

うん、大ファンではないけどね。僕はメンバーじゃないけれど、Barmy Army って人たちがいるんだ（※訳注: サッカーで言うサポーターのような人たち）。僕の友達がボンベイである試合のチケットを持っていて、もし良かったら行かないかと誘ってくれたんだ。クリケットはそこではとても大規模で、イギリスでのサッカーよりもすごいんだよ。試合は大きなスタジアムで行われていて、スタジアム中が上下に揺れていて凄まじかったよ。試合は 5 日間続くんだけ、インド側の

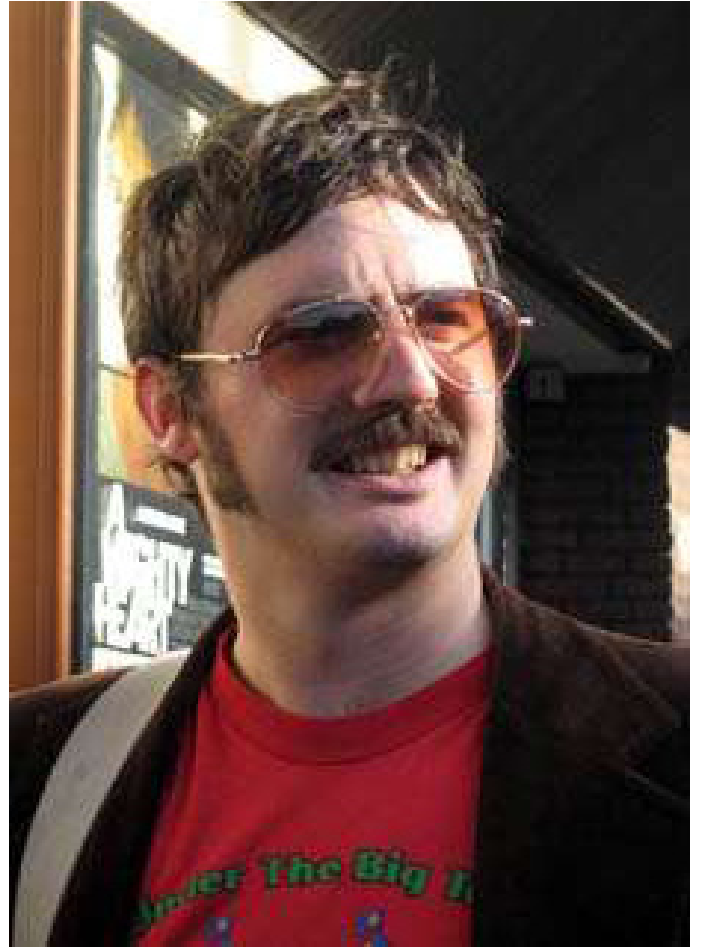
スタンドで1日中ファンがただ飛び跳ねている間、イングランドのファンは全員、この熱気の中で冷静さを保とうとして座らされていたよ。

SF: バンド内の秘密の集まりである The Potters についての噂を聞いたのですが。

ああ、うん、でも秘密ではないよ。いつでも誰でも入れるし抜けられる。秘密というより混乱するね、たまにやっても、すぐやらなくなるんじゃないかな。それは陶芸のある類のあり方における、音楽のあり方だね。

SF: 最後に、ファンへのメッセージはありますか？

ここにいることは素晴らしいよ、みんなに歓迎されていると本当に感じている。全体的に本当に良い感じだよ！



Kula Shaker インタビュー by Daniel and Andrea
2007年6月15日 ブッシュホール (ロンドン) にて

Music section: Bass

ハロー、ボンジュール、ブオンジョールノ、ウィルコメン、ナマステ、オーラ（もし他の国々を入れ損なっていたら申し訳ない、だがこれが私の知識の及ぶ限りの外国語である）、そして、常に人気のある Kula の楽器セクションの第 3 回目へようこそ。

今週は、主にウェールズの愉快的な男、Alonza Bevan のベースと演奏について話そう。

Crispian Mills の瑞々しいボーカルとギターの才能、Paul Winter-Hart の叩き付けるようなビート、Jay、そして今は Harry のサイケデリックなハモンドサウンドと共に、Alonza は Kula サウンドの大きな役割を担っている。だが、私には君たちすべての叫びが聞こえる。いかにして彼は、我々ファンが知り、惚れ込むようになった、あの太いベースサウンドを得たのか？ よろしい、では読み続けたまえ。されば、すべては明らかになるであろう。



ベース / 楽器初心者の諸君のために

もし Kula Shaker の曲を聴いたなら、Alonza のサウンドが、“時々ちょっとドライブがかかっている”とともに、予想よりもずっと深く、澄んでいることに気づくだろう。そして Alonza は、鬱陶しい“フィンガーノイズ”を取り除くために、

弦を死んだままにしておくのを好む。そう、実際に“死んで”いる。彼らは滅多に弦を換える必要がない。「豊かなボトムエンドで、フィンガーノイズがない音を狙ってるんだ。Jah Wobble が Paul McCartney に出会ったみたいな、すごく澄んで時々ちょっとドライブのある音をね。」

ベースを震わすもの

Bevan 氏の選択は、1970 年製のクリーム色のヴィンテージの Fender Precision Bass を、より低音を出すためにネックピックアップだけを使うというものだ。現在これは、Matchless 4x10 キャビネットと Matchless アンプを通して演奏されている。しかしながら、ずっと昔、Kula Shaker がイギリスの最もビッグなバンドの 1 つだった頃は、Alonza は Trace Elliot V6 アンプヘッドと、カスタムメイドの 2x15 キャビネットを使用していた。よって、彼独特の音を得るためのアンプのセッティングはつまり、低音を上げて、中音域はオフ、高音は下げ目。D.I. ボックスを通して直接 PA 卓へ繋がれている。キャビネットにはマイクが立ててあるにも関わらずだ。こうすることによって、PA を通して全てのベースギターの音が出なくなるという最悪のシナリオを防いでいる。

さて、これで上品なウェールズの男、Alonza Bevan のベースのセットアップをご理解いただけたであろう。1 本のベース、1 つのアンプ、そして豊富な才能だ。

それでは我が愛する諸君また次回。PEACE, LOVE & BASS GUITARS!

さらばだ！

TME

Introducing... the fanzine people

Andrea

年齢…26 歳

出身地…ブレーメンとハンブルグの間 (ドイツ北部)

第二の故郷…ロンドン

仕事…新聞の記者 (地域レポートと若者ページ担当)、馬の雑誌の筆者、子供向けの本「Chantie foal diary」(2006) の作者



初めて Kula Shaker

を聴いたのは…1997 年、友達の家でイギリスの MTV を見てたとき

初めて Kula Shaker を見たのは…1999 年、ハンブルグの小さなクラブで。それは私の音楽の理解力を永遠に変えるでしょう

どうして Kula Shaker が好きか…今活動してるバンドの中で一番のライブバンドだし、いろんな意味でインスパイアされるし、10 年間浮き沈みを共にしてるから

お気に入りの Kula Shaker の曲…Great Hosannah

Kula Shaker のライブを見た回数…11 回

Kula Shaker のベストライブ…1999 年、デュッセルドルフの Tor 3

一番貴重な Kula Shaker の思い出の品…サイン入りの虎ジャケットのプレス盤の『K』(※訳注: プロモ盤)、サイン入りの Crispian のピック

他に好きなバンド…Placebo、Blur、Beatles、Harrison、Kasabian、Muse、Raconteurs…

他に興味のあるもの…私の馬の Chanti、読書、書くこと、スケッチ、絵を描くこと

バカバカしい程の時間をファンジン制作に費やす理由…

Kula Shaker はそれに値する唯一のバンドだし、実際私は制作を楽しめてるわ。書き終わらない Dan の記事を待っていない時はね (^_-)

Daniel

年…23 歳 (イングランド南東部のバンプトン生まれ)

出身地…ロンドン

仕事…今は英国映画協会で、気取ったアクセントで電話応答をしてる。働いてなかったときは、バンドでギターを弾いていたか (1971 年のヴィンテージの Gibson SG1 でね!)、姉 (or 妹) の家でおいしいものを食べてたかのどちらか



初めて Kula Shaker を聴いたのは…1996 年、ラジオでだったと思う

どうして Kula Shaker が好きか…顔の毛 (Jay のあごヒゲが恋しいよ)

お気に入りの Kula Shaker の曲…Sound of Drums、もう十分だ

誰がこのファンジンを作ってるのかって思ってる人がいるといけないから……

Kula Shaker のライブを見た回数…12 回 (←多分 7 回くらい多いかな)

一番貴重な Kula Shaker の思い出の品…いくつかの素敵な Kula グッズを持ってるよ、最高のものはサイン入り(Jay も含む) の『K』のレコード

他に好きなバンド…Kula Shaker 以外の他のバンドも実際好きだし、僕のレコードコレクションは、もし倒れたら、僕を物理的に押し潰すだろうね。お気に入りのアルバムいくつかは、Cat Stevens『Tea for the Tillerman』、Richard and Linda Thompson『I Want to See the Bright Lights Tonight』、Ocean Colour Scene『B-sides Seaside and Freerides』、Patti Smith『Easter』、そして Magic Potion『Black Keys』!

他に興味のあるもの…Kula Shaker のファンジンに記事を書く以外には、音楽を聴いたり、買ったり、賞賛したり、論議したり、作ったりしがちな。ビクトリア朝風の首ヒゲも持ってて、たまにつけると違う時代に出くわしたみたいだよ。イギリスの田舎とマフラーも好きだね

Anni

年…26 歳

出身地…ヘルシンキ (岩の都市よ!)

第二の故郷…インターネット

仕事…スケーラブル・ベクトル・グラフィックスをテーマとした卒論。ええ、そうよ、まだ学生なの

初めて Kula Shaker

を聴いたのは…1996 年、ラジオで。最初に聴いたのは Govinda だったと思うわ

どうして Kula Shaker が好きか…私が聴いてた他のどの音楽ともまったく違ってた。そこに意味があるわ。10 代

は Kula を聴いて過ごしたし、長年を経てもその楽曲は私の心から消えない

お気に入りの Kula Shaker の曲…Hey Dude、Hush、Out on the Highway

Kula Shaker のライブを見た回数…まだ見たことないわ……! これはすぐ変わるでしょう

一番貴重な Kula Shaker の思い出の品…今のところ何とか集めた、すべてのアルバムとシングル。一番は James が送ってくれた『Revenge of the King』のレコード

他に好きなバンド…Led Zeppelin、Radiohead、その間にあるものすべて

他に興味のあるもの…コンピュータ・グラフィックス、いろんな人と友達になること、いい音楽を見つけること、コーヒー

バカバカしい程の時間をファンジン制作に費やす理由…友達との楽しいプロジェクトよ。それに私が仕事にしたいことと近いの

